

東寺講堂諸像における仏舎利奉籠の意味と機能

奥島正興（九州大学）

東寺講堂に安置される 21 軀の仏像群は、空海（774-835）の構想によるもので、建久八年（1197）より実施された修理の際に、その頭部から次々と舎利容器が発見された（金沢文庫蔵「東寺講堂御仏所被籠御舎利員数」）。納入状況や文献史料の検討から、この舎利は仏・菩薩・明王に奉籠され、造像当初に由来するものと考えられる。仏像の内部に舎利を込める事例は奥健夫氏によって整理されており、初唐の道宣『集神州三宝感通録』によると、像髻に秘められた舎利が光を放ち人々を感化していたという奇譚が、既にインドから中国へ伝わっていたことがわかる。

空海は『請来目録』にて、代々の師から授かりし仏舎利は三国伝来のもので、万生の帰依を受けるべきことを強調した。しかし、東寺講堂についての先行研究は、主に経典にもとづく教義との関係性のなかで尊像構成の解釈が求められ、この重要な舎利を諸像の意味や機能と結びつける議論は十分に展開されずにいる。そこで本発表では、仏舎利奉籠の意味を重視して、内包された聖性がいかにして像の外側にあらわれるのかを考察し、修行者の即身成仏を介して波及していく宗教的機能とあわせて講堂諸像を再解釈する。

発表者は議論を進める上で、空海が密教的な儀礼や造作を実践するときによく依用する『大智度論』巻 59「校量舎利品」に注目する。ここでは、舎利はたんに釈迦の聖遺物であるだけでなく、本源たる如来の智慧を宿しているからこそ諸人の崇敬を集めていると説かれる。『大智度論』では納入方法には触れないが、道宣が言及した舎利が髻中で光るという西域由来の事例も、こうした智慧への敬慕が根底にあると考えられる。

原浩史氏は、講堂で開かれた経論講讃の儀礼に着目し、諸像の図像や構成は仏智獲得に至るまでの過程を示すもので、研鑽を積む修行者は像に対して即身成仏の完成を願ったとした。これは、供養をなす修行者と、願いを受ける像という顕教的な枠組みのなかでの機能論で、密教の実践における根本道場において、自身即仏と観想する行者の宗教行為と、そこで求められる造形の諸相は具体的でない。

真言密教の宗教実践では、修行者は日々供養法を修して仏の姿を観想し、諸像が秘める仏の智慧を分有する。自心に仏を内包した行者は、自らの身体をもって智慧の力を発揮させ、社会のなかで利他をおこなう。頭部に奉籠された仏舎利は、この即身成仏のプロセスを保証した。このとき、諸像の肌や髪、装身具などを乾漆で盛り上げ、魔を払う役割をもつ明王像の衣文に鎬を立たせるなど、部分的に質感を高めた造形は、行者の観想に具体性をもたらし、自身に仏身を置き換えるイメージを補足したに違いない。開眼直後には、本来心中で観見すべき諸尊に対し、食物の供養がなされていることも注目される。舎利奉籠によって像に付帯した聖性は、身に即して感得できる造形表現に導かれながら、修行者による行為を介して発現していたといえよう。